

2002 年度秋期情報教育論レポート

政策・メディア研究科

学年 修士1年

氏名 柏木たすく

CNS ログイン名 [tasuku@sfc.keio.ac.jp](mailto:tasuku@sfc.keio.ac.jp)

学籍番号 80231486

10～15分の授業を考える前に、授業全体の計画を立て、その中の位置づけや目標を考える。考える上でまずその10～15分の授業が全体の授業計画

### **その授業が対象としている人**

**どのような人に対する授業を考えたのか。できるだけ具体的に。**

「体系的な情報運用（インターネット）に関する教育」を受講する機会がなかったと想定される年齢層（30代～）を想定。「リ・カレント」情報環境教育プログラムを考える。経緯を振り返っている内に、情報リテラシーの切り口はたくさんあるが、インターネットに接続参加する際に、とにかく「セキュリティー設定運用」の認識が大切であることに気がついた。当たり前と思われているかもしれないが、SFCであってもそのポリシーは徹底されていない現状からみて、情報リテラシー導入としての「セキュリティー設定」を徹底する。

### **その授業の位置づけ**

**授業計画全体を通しての目標はなんであるか。**

インターネットに参加する最低限の前提条件としての「セキュリティー環境設定」から開始し、インターネットの情報検索、ツールの活用、インターネットを通じた教育プログラムの認知（SOIなど）といった構想を立てている。

エクセルやアクセスといったアプリケーションの利用、応用は他のコースに設定。

SOHO対応ネットワーク構築に関しても、別のコースに設定。

**全体で何回あるうちのどの回に相当するのか。**

初回のイントロダクションに相当する。まず「セキュリティー環境設定」把握から導入。

**その授業までに受講者は何が出来るようになっているのか**

**その授業が目的としているもの**

この講義を受講したことにより、今後自主的にインターネットに最低限安全に参加運用するポリシーを身に着けること。セキュリティー技術の中身より、まず適切な運用を心がける思考軸の構築。自分は技術知識に関して疎いので（面倒くさい）という言い逃れをしようとする、自分が気づかぬうちに加害者、被害者になりうることを理解してもらう。

**その授業の目的とは何なのか。授業を受けた結果どのようなことが出来るようになるのか。**

インターネット参加環境は、一度環境を整えたら完了ではなく、常に最新の情報を入手し能動的に作業を続けなければならない環境であることを認知してもらうこと。今までの常識では、工業製品は「完成品」販売されるのが当たり前と捉えている「インターネット途中参加者」（世代）にソフトは「未完成品（半製品）」だということの認知を徹底。

インターネット（特にソフト）は、個々人がインターネット利用の際のセキュリティーの

運用をしなければならないことの周知を行う。

情報社会において教育環境の変遷（自らの体験を振り返る）  
情報社会における情報環境の変遷について

・はじめに

情報化社会における情報利用機会はどのような変遷を遂げてきたのか。そしてその変遷の中で自分自身はどのように情報化社会の流れを受け止めてきたのか。私の大学時代、社会人時代の状況、会社退社後に受講する機会があった「緊急 IT 化対応等委託訓練」など各フェイズでの関わりを振り返りつつ、現在までの意識の流れを振り返ってみたい。主眼は「体系的な情報運用（インターネット）に関する教育」を受講する機会がなかったと想定される年齢層（30代～）を想定してみたい。

## 0 社会人（求職者）向け「リ・カレント」情報環境教育プログラムを考える

かつてOA化という流れで、まず企業からOA機器が整備されてきた。OA機器の中で、一番利用されたのは、日本語ワープロであると思う。そして一般家庭にも普及するのは比較的早い時期（80年代後半から90年代前半）であったように思われる。当初は「清書ツール」かと思っていたワープロも92年以降、私の周辺でも日常的に使われるようになった。私個人がワープロを日常的に使い始めたのは、大学2年（1993年）くらいからと記憶している。父が2台目のワープロを購入するに当たり「お下がり」として自分のワープロを手に入れたという状況であった。ワープロを日常的に利用する状況から、文字を「書く」ことから文字を「打つ」ことが当たり前のように感じるようになることは体験した。

ワープロを使い始めてから、特に大学のレポート作成方法に大きな変化を感じた。ワープロ導入以前は、レポートが完成形に近づき、追加資料を入れようとなると大変な手間がかかったが、修正編集作業が以前と比べて格段に楽になった。情報のストックという意味合いでも、自分なりのインデックスを作成する際にスクラップノートを作成するなどの試みは行っていたが、ワープロに入力してインデックス化しておくことで、検索整理が以前より能率が向上した。大学の先生の中にも、ワープロを使って情報インデックスストックを勧める先生がいらっしまったという段階であった。

私が大学に在籍したのは92年から96年なのであるが、この時期はワープロが多機能し、インターネットが身の回りに登場し始めた時期であった。私は自分の体験からではあるが、就職活動も95年度と96年度では大きな変化があったと見ている。95年の段階では、資料請求や申し込みなどは、ハガキか電話に手段が限定されていて、面接の際にも、インターネットやメールの利用習熟度に関しては全く問われた記憶がない。96年度に就職活動を体

験した友人の話を聞いていると、まだ電話、ハガキが手段の中心ではあったが、面接等でもインターネットスキルについての質問が増えていて、ある程度たしなんでいたヒトは有利なケースもあったということである。年齢にして、いま 29 歳～31 歳に就職活動を行った層（1995-6 年代を含む以前）特に多くの 30 代より上に関して、入社当時（以前）からインターネットを通じたスキル（情報リテラシー、メディアリテラシー等）を体系的に学んだ機会もなく、その必要性も感じられていないかもしない。私自身の学生当時は、世間よりは充実したネットワーク環境でツール（メール、ブラウザ、アプリケーション等）を操作する機会を得ていたはずだが、大学同期の友人たちで、情報関連企業に就職していない友人の大半は、会社の業務で用いるアプリケーション操作や、ブラウジング、メールやり取り程度に利用方法が限定されてしまっている。必要に応じて（総合的な運用視点をもてないまま）ツギハギ式で利用を重ねていくため、ボトムアップができていない状況に直面しているケースが多いはずだ。大半のケースが、会社でインターネットを利用し始め、次に自分で開始するという段階を経ているが、会社に関してはネットワーク管理者（いればマシなほうだが）が大概の設定は行っているため、PC の環境整備やインターネットセキュリティに関して概観できるスキルは大半のヒトにとっては育たない状況であると思える。

PC の普及コモディティ化や、特に 2001 年 7 月来の Yahoo BB スタート以降急速なインターネット利用のブロードバンド化が進んでいるが、インターネットを利用しているだけで、個人の PC 環境を整える「義務」「必然性」を意識できていない「途中」参加者が圧倒的に多いはずである。この状況で、学校などで一時期でも体系的に「情報リテラシー」関連の行動規範に触れることのできなかつた「過渡期の参加者（30 代～）」に、「リ・コンテンツ」の意味合いを込めて「情報教育」導入編を受講する機会を設ける必要性を強く感じている。以下に私の経緯から「過渡期の参加者」に提供すべき情報教育の内容を考えて見たい。

#### ・ 1 - 1 自分自身の体験を振り返る インターネットを通じた講義参加体験

インターネットを使い始めたのは 1994 年秋、立命館大学国際関係学部在籍中の時であった。大学内にウィンドウズ PC とマッキントッシュ PC が配備され、メールアドレスが各学生に配布された。

今思えば、ただ端末利用の ID が配布されただけで、体系的な使い方に関してはなんの説明もなされていなかった。興味がある学生だけが操作を始めるという状況であったと思いきこされる。

同時はウィンドウズバージョン 3.1 頃であり、ウィンドウズとマッキントッシュの特徴の違いもあまり理解していなかった。そして OS とブラウザ（当時はネットスケープ）の区別もついていなかった。利用に関しては特にガイダンスもなく、手探り状態でインター

ネットやメールの利用を始めたのを覚えている。

当時、私にとってメールをやり取りできる相手といえば、アメリカの大学に留学していた友人がICUの友人、そしてSFCの知人くらいであった。当時のSFCの知人は、その当時メールも使いこなしていた。その状況を今振り返ってもSFCは、体系的にも当時から最先端環境であったことは今更ながら実感できる。

当時私と大学の友人のインターネットの利用法といえば、メール利用と、ネットスケープを通じたブラウジングがメインであった。当時必須アイテムとしての電子機器という何を思い出すであろうか。振り返ると身の回りでは携帯電話も普及しておらず、ようやくポケベルを持つ友人がいたという感じであった。このような状況で、インターネットに触れられていたのは、時期的にも早いほうであったと思われる。何かを見ようというより、コンテンツが少ない状況で、当時はネットスケープにデフォルトで準備されていたリンクをたどってブラウジングをしている状況だった記憶している。ブックマーク管理をする発想もなかった。

#### ・ 1 - 2 小レポート提出にメールを利用

このとき、新しいツールを講義に活用しようとする先生が数人いた。当時「科学技術政策」の講義を担当し、大学のオンライン化の指揮をとっていた奥山修平先生（現在中央大学教授）である。奥山先生の主導の下、システムは稼動していた。当時初めてインターネット（当時は学内ネットワーク）を通じて授業に参加した取り組みは、レポートの提出（メールシステムを使用）というのが（勉強のツールとして）使った体験である。その当時は、メール自体も珍しいツールであり、このツールを使うことに、どのような利便性があるのか非常に関心を持っていた。当時は、メールシステムというツールの使い方に戸惑う友人も多く、レポート提出という「機会」を与えられ、初めてメールを使ったという友人も多かった。しかし、このようなツールの使用は、学部内でも積極的な利用というコンセンサスが確立されておらず、この時点では利用があまり進んでいなかった。当時そもそも大多数の学生にとってメール交換をする友人が「学内」しかいなかった状況であったからだ。

#### ・ 1 - 3 新聞のデジタル情報を手にするのに苦労

また当時「国際平和学」（故関寛治教授）の講義で、「シミュレーションゲーミング」が半年に1度開催されていた。国際政治の基本を学びながら、講義を進めていく中で、受講者が国際政治の「アクター」を決定。半年間をかけて各アクターの国際関係の中での役割、提言をまとめ、土曜日丸1日を使い「シミュレーションゲーミング」を行うという講義があった。

この時の運営方法は、1タームを50分で切り、各アクターが専用の用紙に用件を記入

して、交渉を行うという作業を行っていた。これらの用件は、単なる思い付きではなく、国際政治の枠組み（資料調査して）行われていた。もちろん参加者全員が用件を把握していることはありえないので、自分が交渉したい項目の資料は事前に集めておいて、その資料とともにメッセージを送付するという形式をとっていた。

94年当時、情報入手に関しては、こまめに新聞や雑誌に目を通し、関心事項をスクラップするという作業を行っていた。新聞のスクラップという作業をはじめて行ったのは中学生の時であったが、スクラップを続けるにはかなり根気も必要であり、整理も大変であった。スクラップした記事をさらに配布用にコピーをしたり、ワープロで要約するという作業にかなりの時間を割いていた。

当時私が、この「シミュレーションゲーミング」を進めていく上で、新聞縮刷版のCD-ROMを当日会場に配置してもらうことを提案した。当時図書館には、朝日新聞をはじめ、新聞社の数社のCD-ROMがあった。「ゲーミング」当日、図書館からそのデータCDを借りて、ゲーミング参加者が提案交渉で知らない内容に関して「リアルタイム」で情報検索できるようにとの思いがあったのであるが、この提案は実現しなかった。まずCD-ROMが所蔵している新聞社毎に1枚ずつしかなかったこと、そもそもCD-ROMの持ち出しが許可されなかったのである。当時はLANの知識も無く、CD-ROMを「共有」する提案もできなかった。しかしそもそも当時CD-ROMというリソースを簡単に共有できたかは疑問である（全く異なるPC上で動くソフトであったため）

#### ・ 1 - 4 ネット掲示板コミュニケーションの開始

当時は、今考えてみるとようやく（学内）LANが整備されはじめた時代であり、「アトソン」というシステム用いて、メールを送受信するのにもかなりのタイムラグがあった。やはり当時私が興味を引かれた「学内コンテンツ」に、「掲示板」システムがあった。現在なら珍しくもない機能であるが、当時はインパクトがあった。この「掲示板」に関しては、学内で自然とフォーラムができ始め、講義に関する学生の意見交換が始まり、ごく少数の先生方がこのフォーラムに参加し始めたのである。当時この取り組みというかこの「出来事」は、私のにとっては新鮮であった。先生方とのコミュニケーションが個人的に不足していたわけではない。しかし講義中に質問するか、個別に質問するような積極的な学生ばかりではない状況で、この掲示板はかなり有効に機能していた。若手の先生方が、学生のフォーラムに「交わり」学生と同じ「視点」で意見の交換をしていた。当時新鮮であったのは、学生と先生方がお互いに意見を交換し仮定を検証し、仮に先生方が間違っていれば、先生が間違いを「認め」、さらに意見を交換して講義を発展させていくといった試みが自然と行われていたことである。先生方に一方的の教えるを請う形でなく、このようなツールシステムを用いて先生方とも「対話」できることが当事は新鮮に写った。

しかしながらこの掲示板システムは、まだ当時とてもリアルタイムでの反映はできてお

らず、自分の意見を投稿してから掲載されるまでは、かなり時間を要していた記憶がある。比較的頻繁に大学のパソコンに座り、投稿状況やメールをチェックしていないと、なかなか議論にはならなかったのである。これが94年当時の段階であった。

#### ・ 1 - 5 シミュレーションゲーミングで掲示板を使うことを提案

95年、大学4年生の後期に再度「シミュレーションゲーミング」に参加する機会を得た。大学の情報化環境はまだウィンドウズ95を導入している段階ではなかったが、メールも学内ではあるが、比較的頻繁に使うようにはなっていた。講義の小レポートも講義によってはメールにて提出が義務づけられ、周りの友人たちもネットの「利用」に関しては馴染んできている時期であった。

大学時代最後の「ゲーミング」ということで、このときも運営に関してはパソコンネットワーク環境をフル活用するように「掲示板」を利用できないか問い合わせをしてみた。また、為替情報や株価情報の反映、ニュース速報掲載など提案してみたのであるが、当時のシステム上では実現は難しかった（参加人数が100名を超えてもリアルタイムの反映が不可能だったらしい）（当時はまだIRCなどの遠隔会議システムの存在も知らなかった）

結局大学在籍中には、インターネット（学内LAN）利用の可能性を考察してみたものの、メールでレポート提出、掲示板で意見交換というレベルで終わってしまった。

いま、レポートを書きながら、95年当時を思い出してみると、私は95年春～夏に就職活動を体験したが、当時はまだ企業情報を集めるにも、説明会にエントリーするにも資料請求はがきを書き、つながらない電話でエントリーをするといった状態で、インターネットなどを用いて情報収集をするといった状況ではなかった。

当時はインターネットから即座に情報を得るという「思考軸」すら無かったように思われる。思い返して見れば、当時「検索エンジン」も無く、「ホームページ」という言葉もあまり知られていなかった。「ポータル」という言葉も多分聞いてはいないはずである。

もちろん情報を発信する側もかなり限られていたと思う。その後、日本でも95年11月23日にウィンドウズ95が発売され、インターネットが身近なものに感じられつつある時期であった。

## 2 在籍した会社での情報利用、PCアプリケーション、インターネット利用状況

当時私が入社したのは大阪の理美容機器製造メーカーであった。面接の時の印象は「社内情報化」に熱心な企業で、95年10月の内定者懇談会で、東京大阪の会場を専用線で繋ぎ、双方向テレビで東京の同期と会話をしたことが印象的であった。定期的にTV会議

が行われていて、新入社員にはノート型パソコン配布ありという点にもかなり期待はしていた。その会社は「情報化」投資に関しては、富士通と手を組んで情報インフラに積極的投資をしていた。集合研修に関しても、大阪を拠点として全国主要支社に双方向テレビのインフラを順次導入し、配信実験を行っている時期であったと思い返される。オープンなシステムではなかったが、社内の業務連絡や個人への連絡は社内メールシステムが整備されていて「ペーパーレス」というニュアンスでの取り組みは進んでいたと思う。

会社には、能力開発制度が準備されていた。開講講座は50種類くらいあり、職能別に必要とされる導入講座があり、簿記や会計、中小企業診断士の受講講座なども準備されていた。教材の委託会社は1社ではなく、複数の会社をセレクトして、それを冊子にまとめて、半年に一度社員に配布するという形式をとっていた。

社内では半年間に1度能力開発面接があり、その際には通信教育の申し込みも兼ねていた。私は、化粧品事業部の営業部に配属されていた。入社当時（1996年代）に通信教育受講に当たって推奨されたのは、「営業マナー」や「営業基礎」といった仕事に直結する内容であったと記憶している。その後、会社で使用していたパソコン（当時はワープロが主流）で富士通オアシスの操作に関する通信教育を受講し（3ヶ月間程度）その後、会社に導入されていた表計算ソフト「ロータス123」基礎を受講した。

しかしながら通信教育制度に関しては、ある一定の期間を定め、基準得点を定めてその点数を上回ると全額会社負担、それ以下は数割負担という程度の決まりしかなかった。そして、入社してから2年くらいの間は、比較的熱心に通信教育を受講するのであるが、会社の仕組みで、上司との面接制度でも、受講確認程度であり、評価にあまり反映されていないということがわかってくると、年長になるにつれ受講者が減ってくるのである。私が在籍した部署は営業系ということもあり、学習で能力を身につけることも大切だが、より多くの時間を現場に赴き、代理店セールスや顧客との関係を強化することに価値観が置かれていた。悪く言えば、日々の業務にかまけてしまい、それを理由にPCスキルの自己能力開発をなおざりにしてしまったということにもなる。ITリテラシーに関する講座は準備されていなかった。会社でパソコンが設置され始めたのは98年くらいからであったが、インターネットに接続された端末は利用できたが台数はかなり限られていた。個人ベースでモバイルノート型PCが配布されたのは2001年2月からであった。

### 3 個人ベースでの情報教育体験

2000年夏、自宅に東急ケーブルテレビ（現在のイツココミュニケーション）のインターネット常時接続サービスを導入した。時期的には、まだブロードバンドが普及する以前であり、導入時期としては早い時期であったと言えるであろう。接続料金も定額となり、ダイヤル接続の時の様に時間を気にしなくてよいことは、インターネットの様々なコンテンツを自由に見られるよい機会となった。ただ当時思い返せば「ITはツールでありネットワ



ークは環境である」という段階までは自分のおかれた状況を理解していなかった。当時の状況は、ツールとしてのパソコンは進歩していたものの、ネットワークという環境に関してはITツールとしてPCを自由に使うには制限がありすぎた。

この状況で、まずたどり着いたのが「SOI」であった。知り得たきっかけは、友人からの口コミであった。驚かされたのは、当事りの記憶では97年度から授業が「アーカイブ」化されていたことである。リアルプレーヤーを通じて講義の映像を見られるという環境をすでに97年当時から提供していて、音声だけ提供というナローバンドへの配慮もなされている点にSOIの設計取り組みの先進性に関心を持った。

またSOI入学に際して必要なものは、「現在メールアドレスを持っていてメールによる連絡がとれること」「ホームページを見ることができること」この2点だけという点。この入学条件に関しては、実験中とのただし書きが記載されているものの、インターネットを通じた場所と時間を選ばない「大学教育提供の機会均等」の方向性を感じられた。

2000年秋学期に村井先生の「コミュニケーションネットワーク論」を聴講していた。このSOIシステムの受講メリットは、レジュメも公開されていて、時間が不規則な社会人であっても「先端の講義を時間を区切ってでも聴講できる」という環境の提供があっこそ続けられたのであると思う。私個人ベースとしては、SOIシステムを知ってから折を見て、自分の興味の範囲の講義を2000年秋から聴講してきた。

今年からSFCにてSOI講義を実際に受講している。理想としてはインターネット概論を履修してから、ネットワークアーキテクチャ インターネットオペレーション（インターネット構成法）インターネットの進化と可能性（インターネット時代のセキュリティ管理）と積み上げで受講するのが好ましいのであるが、時間的に余裕が無いので同時並行で受講している。内容はリンクする講義も多く理解は深まるが、同時に3つ以上SOI講座を受講しているとペース的には消化できない面もある。

#### 4 2001年12月～2002年2月「緊急IT化対応等委託訓練」体験を踏まえて30代以上の情報教育を考える

2001年9月に会社を退社し、私は厚生労働省管轄の普通職業訓練「短期課程 緊急再就職訓練コース」を受講体験した。実施機関は「雇用能力開発機構」と「東京都産業労働局」のどちらかが募集月によって担当していて、私が申し込んだ12月～2月コースは前者の主催であった。受付機関による講座内容には差はなかったようだが、前者が主催の月には、テキスト購入が自己負担であった。

自己都合退職のため失業保険給付制限が3ヶ月あり、このコースを受講すれば「失業保険受給制限期間短縮」のメリットもあった。コース名としては「緊急IT化対応等委託訓練」であった。私自身、インターネット利用や情報教育に関して個人的に関心はあったものの、5年間の業務ベースでは営業担当ということもあり、情報化の本質を理解しているとは自分

自身思っていなかった。この機会に現在のインターネットをアプリケーションの単なる利用だけでなく、システム面からも理解したいとの動機からこの「訓練講座」に申し込むことにした。

「パソコンネットワーク科」

ウィンドウズのネットワーク技術を中心に、情報処理知識やビジネスで必要とされるエクセルやアクセスなどを学習する。

「Webシステム構築科」

リナックスを利用して、サーバ管理者としての技術を習得する。ネットワークシステム等を構築する。

上記のようなコースが数十コース開講されていて、民間のスクールが委託訓練の窓口となっていた。しかし以下のような基準が設置してあった。「30歳以上60歳未満の非自発的離職者、中でも45歳以上の非自発的離職者が優先」このため第一希望は通らず「パソコンネットワーク科」に3ヶ月間通うこととなった。委託校は「中野スクールオブビジネス初台校」であった。クラスは25名で、20代が5名、30代10名、40代8名、50代2名という構成であった。

12月から3ヶ月間、月曜から金曜まで朝9時半から午後3時半まで時間にして324時間「パソコンネットワーク科」に在籍した。授業内容は、パソコンやインターネットの基本構造(ハードソフト面)、初級シスアド講座、アプリケーションソフト操作(エクセル、アクセス)ホームページ作成、ネットワーク講義実習を取り組んでいた。

使用テキストは以下の通りである。

使用テキスト

「ウィンドウズ98ネットワーク構築入門」主婦の友社

「1週間でマスターするホームページの作り方」MYCOM社

「初級シスアド完全合格教本」新星出版社

「マイクロソフトアクセス2000 セミナーテキスト」初級編 応用編 日経BP社

オリジナルテキスト

「エクセル FOR オフィス2000」前期編 後期編

「ITセミナーテキスト」中野スクールオブビジネス編

合計9冊のテキストを中心に授業は展開された。

開始当初在籍生のPC習熟度にはかなり差があったが、受講者はエクセル、アクセスな

どのアプリケーションに関してはマクロ機能まではある程度使える状態になった。私の目的は、アプリケーションの操作ではなく、シスアドの知識やネットワーク実習であったが、肝心のネットワークに関しては、成果を得ることができなかった。

この点に関しては受講者の多数が、アプリケーション操作習得（エクセル アクセス）に関心があったことである。またネットワーク科という講座名にも関わらず、学校側に設備がなかったこと、受講者の大半がアプリケーション講座の抽選に漏れてしまった人たちであるなど根本的な募集面調整からの問題も抱えていた。

また、学校の設備面でも問題を抱えていた。その学校には教室は8つあったが、パソコンが配置されている教室は2つで、実際に稼動しているPCが配置されている教室は、2つ（1つの教室はウィンドウズ98マシン。しかしハードディスクが1Gしかなくネットワーク接続もされていないし起動しても立ち上がらないPCが多数）という状況であった。常時3つのクラスが平行して開催されており、1つの稼動パソコン教室を利用するという状況であった。パソコン教室が利用できないため、1週間のカリキュラムの半分以上が教室での講義形式という状況であった。そして常駐の講師の中には、初心者の「ネットワーク」の質問に答えられる講師がいないという状況であった。そして実際にネットワークを構築実習する環境もなかったのである。

一番メインと考えられたテキスト（「ウィンドウズ98ネットワーク構築入門」主婦の友社）は、講座開講後在庫切れということではばらく配布されなかったのであるが、その本が配布されて驚いた。その本は98年初版の本で、添付されているCDソフトも4年前のものであった。テキストに関しては自費購入していたので、担当講師にこの本を選定した理由を聞いてみたが、この講師も派遣講師で講師自身が教材を選定したわけではなかった。教材としては明らかに不向きなものであった。在庫処理につき合わされたような感じでもあった。「パソコンネットワーク科」とは名ばかり、という状況を理解したのは講座が開講されて、1週間一通り講義を体験して教材を見てから、という状況であった。

実情は以下のリンクのコラムに詳しい。私が体験した内容とほぼ一致している。

「失業者はエンジニアになれるか？」是非参考にしていきたい。

<http://www.atmarkit.co.jp/fengineer/rensai/unemploy01/unemploy01.html>

この講座で自分に不足していた知識を補えたということは事実である。しかしながら、この講座は後からわかったことであるが、同様の講座でも委託される学校によってかなりの差があったということだ。求職者の「再訓練」という意味合いは間違っていない。「緊急IT化対応等委託訓練」は雇用能力開発機構などの組織が運用しきれないニーズを外注したが、各学校の運用レベルまでは把握しきれないため、このような差がある状況になっている。本当の意味でのIT化のギャップを少しでも解消するための構成ではなかった。ウラ側をみると、設備面、講師面、カリキュラム面からも生徒募集に苦慮している学校を「救う」という意味合いもかなり強く反映されていたと思う。私が通った学校も生徒不足は如実に現れていて、生徒の大半は中国からの留学生であった。

同時に私がこの講座を受講しながら体験できたことは、この講座の受講者がどのような点がわかりにくいのかを垣間見ることができたことである。普段はパソコン等をどのような使い方をしてきたのかを伺ってみると、個人ベースではメールやホームページを見ているくらいという方が多かった。経理を担当していた40代女性は、エクセルの定番の使い方はできるが、インターネットの体験は少ないという。PCの利用は、いままでの業務ベースでもアプリケーション利用に限定されているというヒトが多かった。

作業として見てみると「情報の閲覧」「メール交換」業務上の資料、書類作成のための「アプリケーション操作」という段階である。

家にPC（ウィンドウズ機）を持っている受講生は多かったが、メンテナンスはしたことがないという方が非常に多かった。2001年9月にニムダやコードレッドが流行したにもかかわらずセキュリティ対策ソフトを導入している方はほとんどおらず（25人中私を含めて3人）、Windowsアップデートやブラウザのアップデート操作を行ったことはないという状況であった。ブラウザのバージョンに関しても、2年前に購入したパソコンであれば、そのまま利用し続けているという状況であった。そもそもブラウザのバージョンや、OSの種類を「意識」している状況ではなかった。この段階では、日常的にPCを利用して不自由は感じていないが、「セキュリティ」に関しては全く管理していないという状況であった。

授業の最終週に「1週間でマスターするホームページの作り方」のテキストを参考にホームページを作成し講師のプロバイダーにアップロードする作業をしたが、大半の受講者がアップロードまでたどりつけなかった。

そして極めつけは、コースの最終週にほぼ全員が「1週間でマスターするホームページの作り方」のテキストを参考にホームページを作成し講師のプロバイダーにアップロードした際に、何かの拍子にほぼ全員が「ニムダ」に感染したという出来事もあった。気がついていたのは、私ともう1人比較的PCに詳しい方で、自分のノートPCを学校持ち込んでLANに接続した際に気がついたという状況であった。私はたまたまフロッピーで教材を持ち帰り、家のPCで感染に気がついた（ウイルス対策ソフトのおかげで感染はしなかったが）授業カリキュラムでもPC環境整備やセキュリティの基本に関する実習はなかった。

以上のような経験を踏まえて、インターネットを活用した情報教育という観点から、まず大切なことは、インターネット利用に際してはメール利用機能、情報閲覧、情報検索、即時性、双方向といった機能を紹介することではないと思う。特に家庭からのアクセスに際して自分自身の基本的なPC管理が必須であることを受講者全員に周知徹底することである。インターネットはシステムがクローズではなく、単なる利用でもテレビ、ラジオ、電話のように安全性が保障されているわけではないことを講座の初めの段階から繰り返す。この点に関してはSFCの「情報処理」でもある程度は説明されていたと思うが、実際の操作作業は無かったと思う。

特にインターネット普及時に業務に携わっていてワードやエクセルなどのアプリケーション利用に留まっていた「レイトカマー」(途中参加者)がブロードバンド環境でインターネットを利用し始めると、対策ソフトを導入(デフォルト設定)していてもアップデートしていなかったり、常駐しているからと安心してしまい、定期的なハードディスクのウイルスチェックをしていないといった事例が多くあると思う。

身近な事例としては大学院のあるネットワークには、トレンドマイクロ社のウイルスバスターが以前から導入されている。サーバ管理方式のコーポレートエディションと個人が運用するウイルスバスター200X系統に分かれている。アドミン権限を入手して15台のPCを調べてみると、ウイルスバスターの更新が正しく行われていたのはコーポレートエディションでサーバにぶら下がっているPC1台のみであった(ウインドウズやブラウザのアップデートに関してはほとんどなされていなかった)そしてセカンダリサーバ(一部ファイルサーバ)として運用している古いサーバは、マクロウイルスに感染したファイルが多数検出された。古いファイルで誰もアクセスしていなかったため、感染は広がっていなかった。サーバ用のウイルスソフトは導入されていたにも関わらず、マクロウイルスは何年も検出されずにいた。

その理由も非常に単純で、対策ソフトを常駐はさせていたが、全ドライブ検索を行うポリシーを設定していなかったからである。SFCにはCNSの安全対策が施されているのである程度は安心であると思えるが、SFCの中でも、このような状況が「ある」ということは、世間の環境は、かなり脆弱であることは想像に難くない。途中参加のセグメントには、特にセキュリティーの確保からの導入が大切であると考えられる。以下に考えるメニューは、自分の経験(私自身専門知識があるわけではないが、最低限の運用だけは心がけている)から振り返り、途中参加者の多くはなんとなく不自由なくインターネット環境を利用してような錯覚に陥っていることを自覚してもらい、授業の導入として位置づけたい。

#### 「10分程度の授業(インストラクション)の作成」

導入事例として全10回。

導入 インターネット環境に接続する前に必ず確認すること セキュリティー対策

OS編

ブラウザ編

ウイルス対策ソフト編(画面、ログを参考にして)

パーソナルファイヤーウォール編(画面、ログを参考にして)

(参考に進入検知ソフトの役割)

ブラウザの詳細設定(Cookieの管理や)セキュリティーレベルの設定方法に関しては、概要がつかめてからでも良いかもしれない。

本来このような作業は、製品を提供するメーカーの責任として、自動化されていなければ

ばならないものである。受講者には、特にソフト関連は完成品ではなく、場合に応じて更新しなければならない「半製品」であることを認知してもらおう。導入したので完了と思ってしまう利用者は相当数存在するはずである。

## 2 インターネット情報検索法

代表的検索エンジンの「形式」の説明

ディレクトリ型

ロボット型

どちらかを勧めるわけではなく、参加者自身が比較して使い勝手を把握する程度。

現状としては google が最有力であることを伝える。

YAHOO, Nifty, aol などの検索エンジンは裏側では google が採用されていること説明。

検索コンテストの実施。色々な切り口から調べられることを体験

EX アイボやHONDAアシモの「色」を調べるなど。答えは1つだが調べ方により「差」が出てしまうことの事例。

## 3 インターネット情報の整理の仕方

お気に入りリンク情報の管理

ページ保存の勧め

(お気に入りのインポートエクスポート)

インターネットの情報は更新速度が速く、そのサイトの存在は保証されていないので見つけた情報のブックマークのほかに、PCに保存する方法の勧め。

その際、保存形式の違いについても説明(案外意識していないヒトは多いため)

html 完全、mht 方式 html のみ保存の違いの説明。

## 4 メールソフトの選択

メールの受信方式の紹介

S M T P P O P 形式とその他の形式の説明

ウェブメール形式の利点と弱点

添付ファイルのセキュリティー考慮事項

懸賞用、メルマガ用など使い分け方法。海外でも見やすいソフトなど紹介。

私自身は、S F C に来るまで S M T P P O P 形式のメールを使ったことが無かった。

(初めてSFCでメールを受信したのは mew を使ってであったが)その理由は、意識的に使い分けていたからではない。初めてのプロバイダーがAOLであったことが最大の理由である。AOLが特殊なメールソフトを用いているとは知らず、自分では意識的にメールの設定はしたことが無かった。その次にWEBメールを使い始めてしまったので、アウトLOOKなどは用いたことが無かったという経緯である。メールに関しては、メジャーな使い方を知らず、セキュリティーに関しても知識は無かったに等しい。SFCでメールサーバの入れ替えの際に、様々な不都合に直面して、意識的になったという状態である。

5

便利なインターネットサービス(コンテンツ)探し

(旅行登録、ショッピングモール)類

こんなこともできるというサービス群の紹介(検索)

参加者は自分の得意分野を持っているはずなので、参加者の興味にあわせた展開を考えた方が習熟度が上がる

WEBフォルダーシステム(yahoo プリーフケースなどのアプリケーション)

オンラインお気に入り管理ソフトなど(yahoo や blink など)

グループウェアの紹介(Eグループやイントラネッツなど)

フラッシュメール

6 タッチタイピング講座

身体軸の情報リテラシー実践

チャットやIM 利用を通じた上達もありうる?

この回以降タッチタイピングは最終回まで必須項目に

P11にて紹介した「失業者はエンジニアになれるか?」

<http://www.atmarkit.co.jp/fengineer/rensai/unemploy02/unemploy01.html>

にて「午後の授業とタイピング練習事件」として掲載されている。

当事者であった私も当時は同じ「これは事件だ」との見解であったが、SFCに入学してからはタッチタイピングは必須だと理解した。タッチタイピングをマスターする意義を説明する必要性を痛感した事例でもあった。説明されないと単なる時間の浪費にとられるし、我流でタイピングを行って不自由を感じていないヒトの抵抗は結構激しいものがある。

7 ストリーミング体験

フラッシュなどのリッチコンテンツを紹介。技術的背景も説明。

ウィンドウズメディアプレーヤー、リアルプレーヤーなど紹介

SOIの講義へリンク(具体的には村井教授担当のインターネット概論)

インターネットの普及の背景をトレンド技術面双方にバランスのとれた説明。

大学の講義を気軽に受講できるメリット。

導入編から応用編までバランスよくアーカイブされている点を説明。

その他の通信教育のコンテンツを利用できることの紹介。

「インターネット概論」を導入として、次段階が「ネットワークアーキテクチャ」選択として「インターネットオペレーション」「インターネット構成法」大学院レベルの選択として「インターネットの進化と可能性」「インターネット時代のセキュリティー管理」をといったステップを明示。同時に一度履修したら終わりではなく、常に「更新」がかかる講義項目なので、年度をまたいで継続的に聴講参加することを勧める。

S O Iではセキュリティー体系的な管理講座を最上位科目として配置しているが、この項目は、導入レベルにも講義レベルを調整して紹介してほしいと思う。

また、S O Iでは掲載されていないものの、「メディアリテラシー」や「情報リテラシー」との関連を付けた展開を考えてみたい。

## 8 新しいアプリケーションの紹介

IP 電話体験

ネットミーティング

P 2 Pの説明(メッセンジャー ナップスター グヌーテラなど背景も含む)

## 9 情報リテラシーまとめ

### 10 インターネットを取り巻く法律関連講座

不正アクセス禁止法事例など紹介

インターネットの詳しい知識がなくても、法律に抵触する可能性のある事例の紹介

事例 オークションやショッピングモールを

個々のアプリケーション

オフィスシリーズ操作はM O U Sなどの資格取得などの目標にあわせた学習を展開。

ホームページ作成などは、他の講座に。

S O H Oなどの中小事業所を想定したウィンドウズネットワークの講座は別個に設けるべき。一つの講座に詰め込むと総花的になり、効果が薄れる(私自身の体験から)

### イントロダクション セキュリティー管理の必要性

専門的なセキュリティー技術の説明ではなく、身近なアプリケーションの「単純な」活用と日常的に注意することで、被害者、加害者になる可能性を紹介。受講者のレベルに差はあるであろうが、実際に操作してもらうことで体で覚えてもらう(身体軸)(クリック作



業でできる範囲)

Windows を利用している前提として、自分が利用している OS の種類の認知

OS のバージョンの確認方法 スタート画面を立ちあげるとの左端に記載されていることを認知

スタート画面の中にデフォルトで設定されているウィンドウズアップデートをパソコンの使用開始時(もしくは開き時間)に確認する習慣をつけてもらう。

しかし、その画面の説明は大概初心者でなくても分かりにくいので、マイクロソフトが「ホームユーザー向け」に開設している「アクセシビリティ」のページの紹介

<http://www.microsoft.com/japan/enable/default.asp>

(ついでにブックマークの方法も紹介 お気に入りへの登録方法 デスクトップにアイコンとして配置する方法の2つを紹介)

この段階では「更新の自動通知」をインストールするところまで紹介。自動通知の表示は、右下の常駐アイコンに表示されるので、通知があったら「重要な更新」に関してアップデートすることを説明する。後に説明するセキュリティーソフトを導入していても、OS のアップデートを怠っていると、セキュリティー対策にならないことを説明。

次にブラウザの設定の説明。エクスプローラー5.5 か 6.0 をメインとの前提。

バージョンの確認方法

ブラウザを立ち上げ、ヘルプの項目からバージョン情報を確認

5.5 なら SP2 のパッチが当てられているかを確認。

次にウイルス対策ソフトの紹介

代表的ソフトの導入(排他的にひとつのツールを推薦してもよいと考える)

予算的に対策ソフトの導入が難しい場合は

フリーソフトウイルス対策ソフト「AVG」と

フリーファイヤーウォール「ゾーンアラーム」紹介

メールの添付ファイルの検索に関しては、ホットメールを経由することで、無料で MacAfee の添付ファイル検索サービスを利用するなど、存在を知っていれば利用できるセキュリティー運用の智恵を紹介。

もちろん基本的な注意事項も紹介(これはメールの送受信の回に再確認しても良いと思われる)

知らないヒトからのメールは開かない(プレビューだけでも感染する危険性)

添付ファイルの実行形式は開かない(exe や )

## 感想

大岩先生の 2002 年講義集 研究プロジェクト1 -情報教育-の中高年向け初心者教育を参照させていただいた。中高年の方々に理解しやすいインターネット利用の基礎のプログラムを考えていることが体感できる。メールの操作指導に関しては、これ以上丁寧な開設方法は無いと思うので、私がカリキュラムを組むのであれば、こちらを参考にさせていただきたい。しかし気になった部分は、中高年向け初心者教育チームの電子メール送信についても菅沼さんのレジュメでの反省点で「中高年の気持ちがわからない」という箇所である。技術関連に造詣が深くなるほど、初心者の気持ちが分からなくなるということは、どの分野でも見られることであると思われる。しかし特にインターネットツール関連に関しては、現状においては大多数の「途中参加者」は質問することも躊躇している現状であると思われるので担当者もフラットな気持ちで接するのが大切だと思われる。

大岩研究室 研究プロジェクト1のメンバーの方は、初心者の気持ちを十分に汲み（年配をメインとしていることから）慇懃無礼にならない程度に接していけばよいのではないか。

現に私自身もこのSFCでネットワーク環境が理解できず、大学院生なら当然知っているはずのような対応を春に受けて質問するのを躊躇しそうになったことがある。今回の課題に関しても、「情報リテラシー」や「メディアリテラシー」「資料探索法」「情報活動論」「知識情報論」「情報環境論」といった科目の下積みや並行しての知識の習得が全くできていないので、「情報教育論」という科目の課題に対するこのレポートは、自分の思い込みでしかない。この課題も不安なまま取り組んでいる。セキュリティが要と定義しても、その奥があまりにも深いことということだけは、SFCで学ぶ環境にいて十分すぎるほど知ることになったからである。「情報教育」という観点からすると、自分自身の解釈としては業務に携わったおよそ5年間の「ブランク」は、大きな痛手であった。SFCで生活していると信じられないかもしれないが、世間では「情報教育」という観点を体系的（受動的にでも）に学べる機会はあまりないのである。

会社でも同じような状況であった。当初の約束（計画）とは5年遅れで、ノートPCが配布された。社員を合同で集め、2時間程の基本操作の講習が行われたただけであった。ウイルス対策などでは、ウイルスバスターのコーポレートエディションがインストールされ自動化されたため、説明はなされなかった。当時私は出張の多い部署にいたため、インターネットや会社のネットワークシステムへの接続は、NTTドコモ携帯の従量制パケット通信を利用していた。そのため当初アップデートは社内で行うように指示され、セキュリティの管理方針には疑問を感じたこともあった。

私個人の印象としては、在籍していた会社のPC配置環境はかなり遅れているほうだと思っていたのであるが、必ずしもそうではないという興味深い調査が出ている。この調査に関しては、レポートを提出した後収集したものであり、レポート提出期限には間に合

わなかったが、今回授業で発表させていただく機会に提出後のレポートに追加するものである。

表: 会社員の職場での利用状況			
	2001年10月	2002年10月	伸び率
a) パソコン利用	49.9%	60.4%	21%
b) インターネット利用	20.6%	29.1%	41%
c) 自分専用PCでのインターネット利用	9.3%	15.2%	63%
PC利用者のインターネット利用割合	45.9%	52.3%	14%
インターネット利用者の専用PC所有割合	48.6%	55.5%	14%

(注) ネットレイティングスが毎月実施している全国を対象とした電話調査

「どんな会社にもパソコンが用意され、しかもインターネットを利用できるようになっていて、社員ひとりひとりが自由に情報検索できる職場環境を当たり前と思っている。そう感じている。でも実態は必ずしもそうではないようである。日本全国の会社員（パート、契約社員を除く）の調査結果を表にまとめた。インターネット基礎調査（注）の結果から関連するものを抜き出したものである。様々な業種で働く人が調査対象者になっており、事業所の規模や役職も様々である。なお、事業所ではなく個人ベースの調査結果である（表）。

この表を見ていただいてもおそらく「低い」と感じられたと思う。今年の10月調査では会社員の職場でのパソコン利用率が60%、インターネット利用率は29%。自分専用のパソコンからのインターネット利用率では15%と、7人にひとりの割合である。この指標は、役職の高い人（管理職）従業員規模の大きな会社ほど高くなっており、業種でも異なる。

家庭でのインターネット利用率全体（2才以上の個人）は26%だが、会社員の家庭でのインターネット利用率は40%（職場と家庭での併用率は18%）と高く、職場での利用率よりも高い結果となっている。また、2001年10月と比較すると、職場でのパソコン利用やインターネット利用率はかなり伸びている。特に自分専用パソコンでのインターネット利用率の伸びは大きい。インターネットが身近なビジネスツールとして役立つには、家庭と同様に、職場に自分専用のパソコンがあり、それがインターネットに繋がってなければならない。職場での利用にはセキュリティ問題も考慮されるだろうが、諸外国と比べてまだ低い割合ではなかろうか。

（ネットレイティングス 石川 裕道）」

退職後に受講した「緊急 IT 化対応等委託訓練」も受講生の意図と募集方法と、提供されるカリキュラムのアンマッチングが露呈しているのである。そしてインターネットのハイパーリンクのことを「画面が飛んでいく」と本気で表現する一部のおば様達がこのような

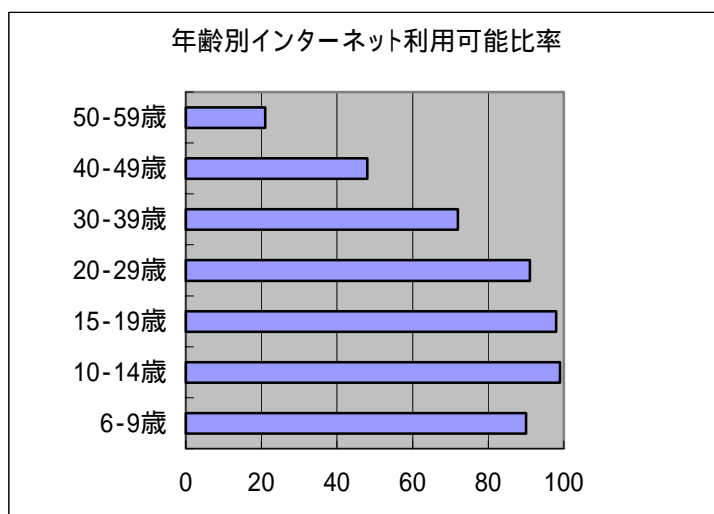
講座に入れられてしまうのは不幸ではない（多少はPCにたしなんでいるヒトとの対比において）

提供する側（雇用能力開発機構や東京都産業労働局）に情報教育の体系的なノウハウがもうすこし考慮する視点があれば、講座を受講することにより、効果はあがっているはずであるが。そもそもこのカリキュラムは外部の意見や専門家にアドバイスを受けたものとは感じられない。また内部の声もアンケートという形をとっていたが、フィードバックは最後まで無かった。制限された環境で懸命にネットワークの講義を担当してくれた先生に対する周囲の評価は、授業が終わればテキストを教室において帰り、復習も予習も自習もしていないのに理解できないと言う一部の生徒によりかなり悪く評価されてしまっていた。「緊急 IT 化対応等委託訓練」では、生徒も教師も学校も三者三様に不幸になる、という負のスパイラルに落ち込んでいた。

私がこの講義で把握できつつあることは、自分自身の「リ・カレント」が第 1 ということである。あまりにも知らないことが多く、5 年前に大学で学んだ内容はほぼ通用しないということ強く実感している（会社業務は特定だったため汎用性にとぼしい）自分の現状を整理するため、過去を振り返り、同時に授業を聴講するなどの手段を取りながら埋め合わせをしている段階である。自分が提供できるポイントは、中（小）企業の社内情報化度合いの説明と（社内の昨年までの現状）私は比較的意識的にインターネットなどのツールを用いて情報教育に意識を向けていたつもりだったが、認識は甘かったという点である。

今回のレポートは、導入としてのセキュリティー教育が大切だという点に結果として行き着いた。デモ講義の内容はあまり特徴のないものとなってしまった。しかし自分自身の体験を踏まえて、特に「中途半端な参加者」「レイトカマー」に対する全体的フォローが必須だと考える。

また「年齢別インターネット利用可能率」（出典 韓国統計庁）でも、30 代以上の「利用可能率」は明らかに低下している。これは日本だけの現象ではないかもしれない。



これは2002年12月11日の「メディアビジネス論」の講義でEコーポレーション  
廉宗淳社長のレジюмеに記されたデータである。疑問点があり、現在以下の内容でメ  
ールにて問い合わせをしている。

韓国では「利用可能」とはどのレベルを具体的には定義しているのか。

インターネットに接続できる（ブラウジングができる）

検索エンジンを用いて情報をたどれる（目的のサイトに接続できる）

メールの送受信ができる（ソフトの設定ができる）

（韓国では）オンラインゲームコミュニケーションに参加できる（？）

といった操作だけでなく、

ネットワークの接続の管理ができる

（一般的なトラブルシューティングが可能 ping や trace route）

セキュリティー管理ができる

（OS、ブラウザのアップデート、セキュリティーソフトの導入、アップデート習慣）

WEB上のサービスを活用（ソフトのダウンロード、WEBフォルダーの利用など）

情報共有ができる

情報リテラシー理念を持ち合わせている

といった、どのレベルを含んで「インターネット利用可能比率」を示しているのか。

また、グラフでは30 - 39歳以降の利用可能率が低くなっているが、この背景は、  
95年にウインドウズ95がリリース（日本では確か95年11月リリース）される前後のP  
C利用率普及率とも関係があるのか。多分この年代の社会人は、学生時代、会社就職前後  
にPCが普及しだしてPC操作に慣れていない段階で、その後韓国のインターネット普及  
ブロードバンド化の波に乗るための機会を逃してしまった（ネットとは関係ない業務に携  
わっていたため）ヒトたちが含まれていると考えている（日本でも状況は似ているはずと  
私は推察している）ブロードバンド環境整備は日本より韓国の方が早かったので「インタ  
ーネット利用」に関してギャップを埋め合わせる意識は韓国の方が早くから育っていたの  
ではないか。日本では高校の情報教育が来年から本格的に始まる状況である。

日本の情報通信白書を見ても、接続数（年齢別男女別）ベースの統計がほとんど  
で「利用可能率」といった感じの意識的統計は読み取れない。韓国では、一般的にみて「イ  
ンターネット利用可能」とは、どのようなレベルを示すのか。

この質問に対しては、返答をいただいた場合、フィードバックしたい。また、日本でも  
このような統計があるのであれば、是非教えていただきたい。